



悦目抄

下





万葉集より、うんまいひのませりへのやい  
 けひの奇也ひねりなりんまのりんま  
 阿ふれぬあひの痛也しんまのりんま  
 うんまいひのませりへのやい  
 うんまいひのませりへのやい  
 世ののりんまのりんまのりんま  
 まののりんまのりんまのりんま  
 只ののりんまのりんまのりんま  
 痛ののりんまのりんまのりんま  
 只ののりんまのりんまのりんま  
 痛ののりんまのりんまのりんま



いぬい冬も色山つらつらと歌と云痛も今うへ  
みらら病うなりてふりこのい  
ふれさくけらあひういされ  
是よりいせや年と痛いい草子院の音合  
あさういれさあ

み山いあう病ういさか  
西子のういあはういさ  
是よりいせや年と痛いい草子院の音合

あさういれさあ  
あさういれさあ

是よりいせや年と痛いい草子院の音合

病よりいれさあ

あさういれさあ

あさういれさあ

いさういれさあ

いさういれさあ

いさういれさあ

いさういれさあ

いさういれさあ

いさういれさあ

いさういれさあ







七〇一と白ひなを御覧のまゝにひらひのまゝにひらひ  
をうまひしつゝ

一 折句のちよとひのまゝにひらひのまゝにひらひ  
よひしつゝひらひのまゝにひらひのまゝにひらひ  
ひらひのまゝにひらひ

ひらひのまゝにひらひ

ひらひのまゝにひらひ

ひらひ

ひらひのまゝにひらひ

ひらひのまゝにひらひ

ひらひのまゝにひらひ

ひらひのまゝにひらひ

一 當世の折句のまゝにひらひ

ひらひのまゝにひらひ

ひらひのまゝにひらひ

ひらひのまゝにひらひ

ひらひのまゝにひらひ

ひらひのまゝにひらひ

一 折句のまゝにひらひ

ひらひのまゝにひらひ

ひらひのまゝにひらひ

ひらひのまゝにひらひ

1. *... ..*

1. 初の「な」と終りの「な」よきしうりては

たし「ま」の「ま」を「ら」にあらうの「ま」の「ま」

非格より「か」の「ま」を「ま」にあらう

ら「ら」の「ら」を「ま」にあらう

の「ま」の「ま」を「ら」の「ら」に

り「ま」にあらうとなじく「ま」の「ま」の

格より「ま」の「ま」を「ら」の「ま」

あり「ま」の「ま」を「ま」の「ま」

ら「ま」の「ま」を「ま」の「ま」

れ「ま」の「ま」を「ま」の「ま」

れ「ま」の「ま」を「ま」の「ま」

ら「ま」の「ま」を「ま」の「ま」

ら「ま」の「ま」を「ま」の「ま」

ら「ま」の「ま」を「ま」の「ま」

ら「ま」の「ま」を「ま」の「ま」

ら「ま」の「ま」を「ま」の「ま」

ら「ま」の「ま」を「ま」の「ま」

ら「ま」の「ま」を「ま」の「ま」

ら「ま」の「ま」を「ま」の「ま」

ら「ま」の「ま」を「ま」の「ま」

ら「ま」の「ま」を「ま」の「ま」

ら「ま」の「ま」を「ま」の「ま」

ら「ま」の「ま」を「ま」の「ま」





一 昔の句は〜の事

うしろ〜の事  
うしろの事〜の事

一 ひびひ

おろ〜の事  
あ〜の事

一 贈言は〜の事

人〜の事  
し〜の事  
し〜の事  
し〜の事

て〜の事  
〜の事  
の〜の事

一 小町〜の事

は〜の事  
人〜の事

の〜小町

わ〜の事  
わ〜の事  
一 あり〜の事

はまののちのめよまもるるめがけ何  
神のいぬもてあやうしなま

とらわれんし 業平女よらりて

あまのしと神のいぬめたなまし何

めえあらしとまうしあまん

一 大貳三位とよそゆるりよとまうらたまひて

後冷泉院御新

まの人のいぬとまうし何の

ういあやしん ねいしんせん

とわわられん 大貳御新

とまうし何のいぬとまうしあまひて

まうらりゆめゆきそま

あうららひねがけりてまらるるのなまあり

ぬいしんしんまもていりおわいしあがし

あうららひ人のいぬとまうし何のいぬとまうし

禁中仙洞とてまあまうしとまうらあやわらに

あうららひのいぬとまうし何のいぬとまうし

あうららひのいぬとまうし何のいぬとまうし

あうららひのいぬとまうし何のいぬとまうし

あうららひのいぬとまうし何のいぬとまうし

あうららひのいぬとまうし何のいぬとまうし

あうららひのいぬとまうし何のいぬとまうし

阿の儼いふいふもあつて一字とりそふのいふの  
結句乃いふあつていふ今とわかれまゝ  
きりあけまゝのいふもあつていふ集まひ  
たふの毛を鴉鷲あつていふ

後一条院春日の香に上東門院

うのいふいふのいふいふいふいふ

あつていふいふいふいふいふ

浄土 上東門院

いふいふいふいふいふいふいふいふ

わがいふいふいふいふいふいふ

あつていふいふいふいふいふいふ

田ん田畑かりのいふいふも三句あつていふ  
二句又いふいふいふいふいふいふいふ  
うりていふいふいふいふいふいふ

あつていふいふいふいふいふいふ

あつていふいふいふいふいふいふ

あつていふいふいふいふいふいふ

あつていふいふいふいふいふいふ

業平のいふ

あつていふいふいふいふいふいふ

あつていふいふいふいふいふいふ

あつていふいふいふいふいふいふ

らぬうらぬう——兼平いこいぬ——と結志つかりて  
 一古新とらふ事一宵一のち事也上はれぬらうら  
 らうわぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ  
 ちよゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ  
 二の括と——の括とらうら——とらうらとらう  
 らうらうらうらうらうらうらうらうらうらうら  
 情とらうらうらうらうらうらうらうらうらうら  
 一とらうらうらうらうらうらうらうらうらうら

月夜うらうらうらうらうらうらうらうらうら  
 ことらうらうらうらうらうらうらうらうら  
 ことらうらうらうらうらうらうらうらうら  
 ことらうらうらうらうらうらうらうらうら

わやの梅さだらうらうらうらうらうら  
 ことらうらうらうらうらうらうらうらうら

こらぬとらうらうらうらうらうらうらうら  
 月よとらうらうらうらうらうらうらうら  
 ぬとらうらうらうらうらうらうらうら  
 中寄ぬやうらうらうらうらうらうらうら

人——の夏のぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ  
 らぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ

ちとらうらうらうらうらうらうらうらうら  
 わらうらうらうらうらうらうらうらうら  
 わらうらうらうらうらうらうらうらうら

こころとあつらひのまよひりちかきとせりちりちりまが  
 せふにけいけいなるきくこころもつらきしるふにけいけい  
 してあつらひがまよひるにけいけいなるまよひり  
 けいけいなるまよひりけいけいなるまよひり  
 けいけいなるまよひりけいけいなるまよひり  
 けいけいなるまよひりけいけいなるまよひり  
 けいけいなるまよひりけいけいなるまよひり  
 けいけいなるまよひりけいけいなるまよひり  
 けいけいなるまよひりけいけいなるまよひり  
 けいけいなるまよひりけいけいなるまよひり  
 けいけいなるまよひりけいけいなるまよひり

けいけいなるまよひりけいけいなるまよひり  
 けいけいなるまよひりけいけいなるまよひり  
 けいけいなるまよひりけいけいなるまよひり  
 けいけいなるまよひりけいけいなるまよひり  
 けいけいなるまよひりけいけいなるまよひり  
 けいけいなるまよひりけいけいなるまよひり  
 けいけいなるまよひりけいけいなるまよひり  
 けいけいなるまよひりけいけいなるまよひり  
 けいけいなるまよひりけいけいなるまよひり  
 けいけいなるまよひりけいけいなるまよひり  
 けいけいなるまよひりけいけいなるまよひり  
 けいけいなるまよひりけいけいなるまよひり  
 けいけいなるまよひりけいけいなるまよひり  
 けいけいなるまよひりけいけいなるまよひり  
 けいけいなるまよひりけいけいなるまよひり  
 けいけいなるまよひりけいけいなるまよひり  
 けいけいなるまよひりけいけいなるまよひり

松のちりごとわきよーあ

ちりまらわきよーとれつとよよこいせわさ  
りーくみよーらて是とらりらうらとせん  
しそわらんと親となれむひくもい道乃磨也  
む外乃是式秘極云現大身滿虚空現小身入  
芥子とらり 純音の云

我やしのよのありかろくさろくろ  
ちりよれえーそらめうまられ

東三条左大臣のありくろくろんむろろせいつ  
みろの老とからぬこの春まくろろすろーち  
こ世のあーはむろくやのけろくあーら

とさかうろとまらりまを毛いそとろくろくろ  
あーいあねんよからうろくろ古方ろろくろくろ  
なる人の本乃是の事あねんとわわ珠ー  
くろくろだらんよんろくろろろろろろろろろろろ  
あは風情詞とろくろけろくろせまのわろくろろろ  
しーいもかろくろれいあ新とろくろくろくろろろろ  
あろくろろろろけのんあからろろろろろろろろろ  
よよれろろろあろろろろろろろろろろろろろろ  
古方ろろろろろろろろろろろろろろろろろろろ  
ろろろろろろろろろろろろろろろろろろろろろ  
二句ろろろろろろろろろろろろろろろろろろろ

まふしこころのうらみは昔ながらの親しくむかひく  
るふどいそぎの難とすゝるは是れこそいふ事なり也  
一 奇しき事ありてはよむといふことありしを清  
神の長うらみをいかに清くしてやう清くしてと  
れおとつてのしれいあてあまことありしに  
えいはいくおいそぎのこころおろけりて  
弟にとうねりしをいふもやまはしよとほのや  
とふしころ也又昔に云ふのいふいふも  
かたりてくくくくくくくくくくくくくくく  
いみちしきくくくくくくくくくくくくくく  
事しよとある也回りしれいあてあまことありしに

わくくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
くくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
はくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
くくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
一 禁忌とくくくくくくくくくくくくくく  
くくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
志の高運いそぎの禁忌よいふことありしに  
くくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
のくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
のくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
くくくくくくくくくくくくくくくくくく  
たのくくくくくくくくくくくくくくくくく

















人ありといひ神にれぬものかこの夫あまた世に  
 人よもあつたひかりひかりのうらやま也大なる身よもあつた  
 ぬ摺あつたといふを不考とせぬといふこと一詩家の  
 たといふももといふ一 世思妙院雲水清高法師  
 晚叟経林 いづか碩教あなう一と能くうかたれ  
 九考のうといふ四葉大納言も任の朗誦の集撰撰入の風う  
 又長元八年三十梅の奇合よ

あまもてとせりて命の行一これの  
 色一と人のいのちのちかきまじり終

これの病二あつたといふことあつて勝にるるおれ  
 病の病あつたといふあつたといふありあつたといふあつたといふあつた

人のありとあつたといふことあつたといふことあつたといふこと  
 毎つともひらきといふことあつたといふこと

貞子皇后の一条院の病也中用白道隆のいひといひ  
 也は右帝なやといひといひ也病にるる

あんななみこの多をゆう一哉  
 とあつてみくらあつたといひといひといひといひといひ

とつを新てのら院帝病一つをいふといひといひといひ  
 中は一とあつたといひといひといひといひといひといひ  
 一わつ殿上人の月のおのあまのあつたといひといひといひ  
 よる人といひといひといひといひといひといひといひ



ふらり人のこゝろあまをけりていふに  
 むねのうららかに神つゝの遣おはぬらむれはか  
 くまこをみてそなはひらゝらやゆべりの  
 うらやあつたひんやうはよこもこゝろい  
 ぬかろくやあやうかそそそそそそそそそそそそ  
 うらぬ又つていふそそそそそそそそそそそそそそ  
 人々あぬ人いまひのそそそそそそそそそそそそ  
 うらそそそそそそそそそそそそそそそそそそそそ  
 つらふらふらふらふらふらふらふらふらふらふら  
 けりあつたひんやうはよこもこゝろい

のやうそあつたひんやうはよこもこゝろい  
 うらぬ又つていふそそそそそそそそそそそそ  
 人々あぬ人いまひのそそそそそそそそそそそそ  
 うらそそそそそそそそそそそそそそそそそそそそ  
 つらふらふらふらふらふらふらふらふらふらふら  
 けりあつたひんやうはよこもこゝろい

あつたひんやうはよこもこゝろい  
 うらぬ又つていふそそそそそそそそそそそそ

あつたひんやうはよこもこゝろい  
 うらぬ又つていふそそそそそそそそそそそそ  
 人々あぬ人いまひのそそそそそそそそそそそそ  
 うらそそそそそそそそそそそそそそそそそそそそ  
 つらふらふらふらふらふらふらふらふらふらふら  
 けりあつたひんやうはよこもこゝろい

内侍をくまのゆくくせつやうりくくふりり  
やうくくくゆれ月一院の清阿若いかりう  
ありうりうりうりうりうりうりうりうり  
りうりうりうりうりうりうりうりうり  
うりうりうりうりうりうりうりうり  
てみまともれあきうりりり今の世まてうり  
たとよひつうえられゆり香煙孝のく唐白樂天  
むの娘あゆみのあに一の草室とまめてすうり  
阿の節よ遠むさの遠ハ枕とそんたてくまう香煙  
孝の害ハ屋とわくそめうりうりうりうり  
ゆりうりうりうりうりうりうりうりうり

う換のゆのたわくぬぬうまひうりうり  
あがらまらり

一野宮の弄合の判者ハ源順なり女房とあうり  
せうりうりうりうりうり

おくれのねさかるといあのまこと

とみまへうりうりうりうりうり

とめんひうりうりうりうりうりうり  
女房といふとまて戯歌英階む恐恩裏翁有似  
おれうりうりうりうりうりうりうり  
一何難をわくうりうりうりうり  
おれうりうりうりうりうりうり

魏文帝ハ怪大狸

初曰 義玉白如截肪黑辟餘漆極赤然冠其律也  
粟とわつとみづもさうしありなれとむりてか  
つこいれもてすれ判者いもやみひらうりこも  
あまふたうせしも極とれう人んこはた師  
函師く人びるれ也後れは千徳かしく人判  
者よりこつひらもトえれりつなれこも深中地云  
固作の家れ奇合と後れ判者よりしとくむりく  
あつとみづ極くのこもとむりつきうりやうの  
らりこりりらももらひ世のそこもくあしんあらひ  
られぬらふひも千徳といふもつら下のめは徳とあ  
らうと判とてとも用と云いあつと也

一 大中長徳道う父於基よかふりていふすさあつこ  
入道式約心親まの清子日れもあつとあつとす  
つそ作と一於基云いんゆらうそ

らと極まてう義もろねもろもあま  
君一むらもてくうあつとやつん

世もろりこも也といふ於基とてく極つこ  
つたろ極とろりて徳宣とらてと思はう外は  
昇殿とゆりてましの清子日わらひあつとあつと  
てもむつとやわらひらうあつとあつとあつと  
あつとあつとあつとあつとあつとあつとあつと  
あつとあつとあつとあつとあつとあつとあつと

るにさしつゝわがし得とさそもろわがのといわたり  
よわわらん又そ座にくよたあめれがそそり  
弁とゆじらひひろくちろしとあう下し座義のふ  
わらちとわがせ

くし遍昭寺そ月見ゆきうた山家秋月とさゆと  
うらうらうの中よまぬ長お下うの秋と殿との  
香よそぬしそりけつとまうらやれしとあかん  
とわがせ下されてまうれ清ると結くのりよあひ  
山家秋月とつよとよとゆたり

とふんとそたれた山家のあこれわら  
月のかりいとさひしうらわたり

件の懐身れ草葉たそ中幾とらりてそ任つちか  
家してこりりわられらりらり小山のそ若とそ  
とせにやまらりけまハ範永のそあそゆと感嘆して草  
葉のうらよ 範永雅人武和弁得と併とうと  
つちし清らりらりと範永わらりの感よえまて  
うの草葉とこひとあまて錦の袋よ入て葉物に  
てらひよとそそりらりらりらりらりらりらり  
わらしとあまそあうのそとらうしとさあう人のそ  
とせあかうしとけとあひとさうと

抑和奇よ前後の二句もよく則ち恵の二法天地二  
理也三重の次第とたてて迷ひあらずよ三毒三惡と  
也格のあらず三身三徳とありて痛八痛とさうさつが  
回四苦八苦といふ儀也又句とわすれ六義とをりす  
め斯六根と表と九品十作とわすれ八の徳八尊十  
勇十如と表とらゆ也三十一字は業相好と表すこれの  
はのらふれおたいこのこととと一あて  
わこれゆがのみゆうとさうさく  
儀のらあのみこのことゆりあすぬ  
阿さひさくさすもふてはさの  
いよとこれい佛といふことゆすは神も相交も路ふ

とつりなりなまのりあれいよ遺らうあこ戲なり  
思つたあういといつりとありひつりゆて一首三句  
一斯六三十七その佛とら三十一字の文は句なり  
くさうりては性随縁九月喜のぞにむかふと  
とのうらうらひ照し三神昂是の花嬉榜の風り  
りくさうりては性随縁九月喜のぞにむかふと  
いよの浦れむとすあひまをんぬえいといふ

右秘書者愚光の一方に父は源朝也上古奇仙髓  
口傳雖云云實後書詞畫の父母之書ありて是れ  
末代嬰児に授けしもの大徳淺深不可出しま  
和歌言全依  
及例已に續くと雖も多岐に秘言有法病之科  
為陰具  
科撰と書進借撰の底不の及他見元賢と

右官右大臣後家息

左衛門佐基後 在列

師道より相傳の秘書一巻ありてそまうり  
のありしはこまの相傳よりかゝるる名となり  
とらせしめしと画の底よかりてひらきあり  
くはありしと

五條三思

釋阿 在列

一はあかしくいけ道はまゝにけれ作道りり  
 一はあかしくいけ道はまゝにけれ作道りり  
 一はあかしくいけ道はまゝにけれ作道りり  
 一はあかしくいけ道はまゝにけれ作道りり  
 一はあかしくいけ道はまゝにけれ作道りり  
 一はあかしくいけ道はまゝにけれ作道りり  
 一はあかしくいけ道はまゝにけれ作道りり  
 一はあかしくいけ道はまゝにけれ作道りり  
 一はあかしくいけ道はまゝにけれ作道りり  
 一はあかしくいけ道はまゝにけれ作道りり

後成のまゝの月のみ

藤原氏 在

世継書の子の事外にゆるかき一は極のりり  
 一はあかしくいけ道はまゝにけれ作道りり  
 一はあかしくいけ道はまゝにけれ作道りり  
 一はあかしくいけ道はまゝにけれ作道りり  
 一はあかしくいけ道はまゝにけれ作道りり  
 一はあかしくいけ道はまゝにけれ作道りり  
 一はあかしくいけ道はまゝにけれ作道りり  
 一はあかしくいけ道はまゝにけれ作道りり  
 一はあかしくいけ道はまゝにけれ作道りり  
 一はあかしくいけ道はまゝにけれ作道りり

物原 守

飯島書店  
名古屋 記念橋東詰  
電話(中)2766

書と相傳せんといふ起稿文をうさゆりたる者あり  
うまう所のせむゆひといふうさゆりたる者あり  
ふりていふ者ありといふうさゆりたる者あり  
ありといふ者ありといふうさゆりたる者あり

起稿文の事

為成、三々

正保元六月二十七日

前大納言為世 在判

正保貳年五月吉日

刊行



